

# No. 1284

## — 特 集 —

数々の話題を生んだ甲子園。が、この甲子園の熱戦に全国の人々が釘付けされる時、もう一つの高校野球が開かれた。

# 二つの高校野球

神宮球場では8月12日から第25回定時制通信制高校の全国大会が開かれた。全国から選ばれた40校、最年長は32歳の野手、子連れの選手もいる。第一試合、山口県立下関西高校と石川県の金沢市立工業高校の対戦。高年齢者の多い金沢工業、キャッチャーの山口君、29歳。ファースト浦岡君26歳、ピッチャー大宮君、17歳、サード新田君、19歳、セカンド杉谷君28歳。観衆のいないスタンドで熱戦が続く。しかし、高年齢者の多い金沢工業は後半疲れが出たのか、健闘むなしく負けた。翌日からサインはユニフォームを作業着に変える。が、そこには負けた暗さはない。

力いっぱいやったという気持があるからだ。

たとえ負けても自分たちの力を出せばいい。去年は長雨にたたられ、大会は途中から中止した。去年の選手末広君（足立高卒）は「もう、くやしくて、くやしくて、あんなに一生懸命練習したのに残念でならない。あんなことは二度とあってはならない」と語る。栃木県小山市。この町の工場には定時制に学ぶ多くの高校生がいる。小山高校のエース・土谷君はある会社の電気関係の仕事、主将でキャッチャーの菊地君は組立て作業だ。練習時間が自由にとれない彼らは夜遅く部屋のあかりを求めて練習する。チームは全国大会をひかえた日曜日、久しぶりに全員集まった。全日制のグラウンドを借りて、最後の調整だ。

「日頃の猛練習が稔ってか、小山高校は準決勝まで勝ち進んだ。相手は優勝の呼び声が高い神奈川県湘南高校通信制だ。2対0とリードされた5回表湘南松永投手を打ち、同点、一度はリードしたものの、結局6対3で破れた。

「思い切って投げました。悔いはありません」と土谷投手。「野球は心のささえでした」と菊地君。

白球にかけた青春に甲子園も神宮も変わりはない。ただちがうのは、試合が終って両チームが握手して別れることだ。